

厳しい経済環境の中、就職先を求める「就活生」たちの逆風も続いている。

「また駄目だったんだ」

静岡市葵区の鈴木彩華(23)は涙を拭った。昨年3月31日夜、1週間前に最終面接を受けた企業からの連絡を待っていた。何度も携帯電話を見て、ポストも確認したが、連絡はなかった。採用は4月1日から。「何が駄目なんだろう」。途方に暮れる思いだった。

11年夏から就職活動を始め、事務職を中心に約15社に応募したが、落とされ続けた。最後の「頼みの綱」が切れ、「私なんか世の中に必要とされていない」という絶望感に襲われた。

◇ 大学3年生の冬、友人たちが企業説明会に出るなどの就活を始めた時、「何とかなるでしょ」と思ってた。4年生の夏にようやく焦り始めたが、「何となく」で会社を選んでは書類を出していた。

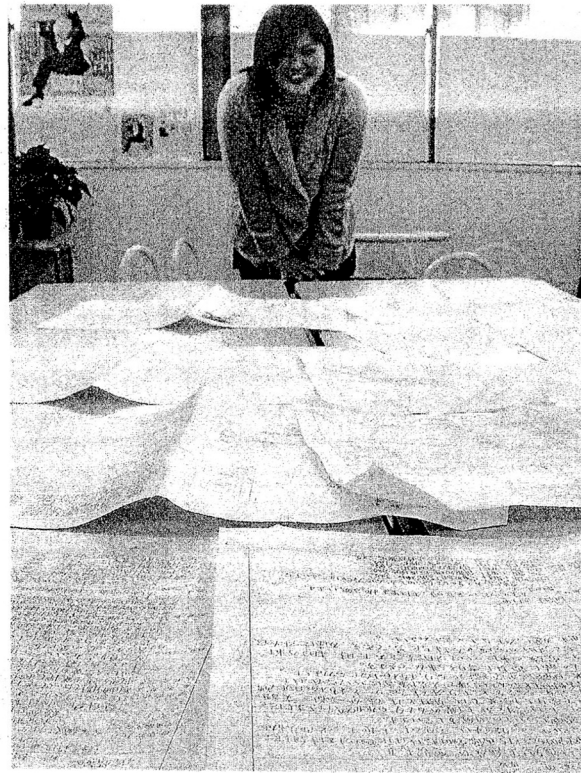
なかなか内定が出ず、就職が決まった知り合いにエントリーシートを見せて相談した。「内容は悪くないけど、字が汚いよね」と言われた。結局、就職できないまま、大学を卒業した。「何となくで生きていました。人生なめていました」

卒業後は県の「インターン臨時職員任用制度」で県の臨時職員として働くかたわら、就職活動を続けたが、そ

も生就活ない諦め

卒業後やっと内定

就活中に書いたエントリーシートを見ながら「たくさん書きました」と話す鈴木さん



「人の役に立ちたい」

れでも約15社に落とされた。何度もくじけそうになったが、「自分から諦めたら、本当の意味で社会に必要とされなくなってしまう」と、心の警報が鳴った。「人の役に立ちたい」。それが自分の願いであり、働く意味だと気が付いた。

◇ 昨年9月、静岡市のハローワークで、歯科医院で歯科助手を募集しているのを見つけた。面接は院長と「対一」。ここでずっと働きたいと思うならいいよ、おいで」と言われた。就活を始めて1年7か月。ようやくつかんだ「内定」だった。

別就活指導塾「ジョブエール」代表の松本保美は「諦めずに続けていたら、たくましい自分に変わり、必ず見えてくれる人が現れる」と就活生にエールを送っている。

両親に「ありがと」をいませぬと「お礼を言われ、うれしそうに目を細めた院長を見て「ああ、この人は患者に必要とされているから、この仕事をしたいんだな」と思った。「ほんの少しかもしれないけど、私も世の中の役に立っているかも」。そう思ったら頬がゆるんだ。

◇ 県雇用推進課によると、12年3月現在、就職を希望したが、就職先が決まらずに卒業を迎えた県内の大学生は531人、短大生は82人、専修学校生は127人。静岡市の個

しばらくは受付係として働くことになった。ある日、診